# 軍事政治特集：習近平による軍の大規模粛清

漢和防務評論 20150504（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

| |
|---|
| 習近平の反腐敗運動は、どのような特徴があるのか、漢和防務評論誌に関連記事がありましたので紹介します。<br>運動の実態は、江沢民の影響力を完全に排除し、高級幹部の子弟たちの”紅二代”が権力を掌握するための運動であるようです。<br>反腐敗の名目で行われる軍を巻き込んだ政治闘争の様相を呈しています。周辺国も中国の内部抗争に巻き込まれないようにしなければなりません。 |

KDR 平可夫特電：
2014 年 12 月以降、習近平は、反腐敗の名目で軍及び国家安全部高級官員に対し大規模な粛清を行った。そのうち 2 名の国家安全部副部長、16 名の将軍及び第二砲兵副政治委員は、汚職の名目で逮捕された。このような大規模粛清は、鄧小平以来、初めてである。
中国軍の 4 軍種の司令、各大軍区の司令は、僅か 6 ヶ月の間に習近平の粛軍運動に対して 2 度も忠節を表明した。このことは汚職摘発によって軍の士気が動揺し団結が弱まっていることを示している。中国においては、各級の地方や軍隊が積極的に忠誠心を表明すればするほど問題があることを意味する。習近平の反腐敗運動は、純粋に反腐敗を目的としているのだろうか？或いは、政敵の粛清を兼ねているのだろうか？KDR は、両方の要素があると考えるが、後者の要素が大きいと考える。
反腐敗について言えば、中国軍の腐敗状態は、僅か 16 名の将軍を粛清しただけで清潔になるほどの状態ではない。中国軍は戦力は保有しているものの戦える軍隊ではない。特に現代文明国家の軍隊とは戦えない。

江澤民の時代から、軍隊内部で”百萬雄師”、”千軍萬馬”と言う言葉があった。その意味は、師団級の将官ポストは百萬（元）、軍級の将官ポストは 1 千萬（元）で買えるという意味である。
粛清の方式や内容及び軍上層部の最新の人事動向を見ると、習近平の軍掌握の理念が分かる。実際は毛沢東のやり方と同じである。KDR が観察した結果、特徴は以下の通りである。

1 つは、自分たちの国土（中国）を紅二代（中国共産党高級幹部の子弟）が武力で支配することである。多くの高級幹部の二代目軍人を抜擢する一方、紅二代の軍人を粛清したり左遷したりはしない。今後、軍人であろうと、文官であろうと紅二代が権力を掌握する時代が始まる。したがって紅二代が関係する汚職事件は多いが、

紅二代が逮捕されることは無い。

2 つ目は、各軍区、武警及び軍の首脳を入れ換えることである。これは毛沢東のやり方であった。今回の首脳入れ替えの規模は相当大きく、7 大軍区に及び、主管だけでなく副職主管、参謀長の間でも入れ替えを行った。このような方法は軍内に党派や派閥が形成されるのを防止する。これらの人事処置は、北京軍区が最大であり、司令、副司令、参謀長を全て入れ換えた。習近平は北京軍区に最も配慮したことは明らかである。4 個の軍区は参謀長を入れ換えた。
習近平がこの 1 月に雲南に駐屯する第 14 集団軍を視察した際の動向から明確に分ったことがある。それは、薄熙来時代から軍が政治闘争に巻き込まれたことだ。多くの伝聞情報によると、かつて薄熙来は第 14 集団軍を視察し、軍の指揮権を収奪しようとした。
軍内の反腐敗運動、特に 16 名の将軍の粛清は、徐才厚、郭伯雄事件の後遺症と密接に関係がある。このことは、実際上、習近平が逐次かつ徹底的に江澤民派の影響力を排除しようとしていることを意味する。人事異動の細部はすでに官側の新聞等に出ているので省略する。徐才厚が抜擢した子分達はすべて粛清の対象になった。例えば二砲副政治委員の於大清である。

このような軍の大規模粛清は、その他の社会主義国家、さらに北朝鮮においてさえ最近 25 年間は見られなかった。しかも非平和的手段で行われている。汚職の罪名で軍の高級幹部を粛清することは、徹底して懲らしめるためであり、命を奪うことになる。今後軍内部で大きな反発が起きないだろうか？習近平自身が報復を受けないだろうか？
現在、習近平の権力を脅かす不穏な動きは見られない。それどころか、これらの粛清運動が後押しされている。その理由は、粛清された軍人のポストが新たな紅二代によって引き継がれているからである。これは習近平個人の力量である。軍隊は地方とは異なるので、一旦職位を粛清されるとその人の権威は雲散霧消する。多くの将官の地位が金で買ったものであればなおさらである。
粛清規模が大きかった理由は、徐才厚が総政治部主任及び軍事委員会副主席に就いていた期間が長かったからである。彼は、江澤民の意向の下、抜擢したり、高級軍人の地位を大量に売買したりした。

3 つ目の特徴は、習近平の出身母体である南京軍区においては、未だ粛清運動がなされないことだ。同軍区の多数の幹部は抜擢された。徹底的に粛清されたのは徐才厚、郭伯雄が盛りたてた東北と西北である。例えば、新任の北京軍区司令宋普選は、すでに中央委員でも中央候補委員でもなく、南京軍区副司令員である。しかし彼の名前”普選”は共産党にとって嫌いな言葉のはずだが。

紅二代出身の軍人は現代の戦争を戦えるのか？結論は：戦えない。これらの人々の

教育は文革時代に始まっている。彼らは 1966 年前後に軍に参加し、毛沢東が発動した各種の出鱈目な政治運動を逃れ、また良好な軍の職業教育を受けた経験が無い。参軍時、年齢はおおむね 16 乃至 17 歳であった。一部の人はもっと低年齢であり、初級中学、高級中学も卒業していない。1979 年以降になって、やっと軍の院校に進み、卒業証書を得た。例えば、今回の約 30 名の最高級将領の人事を見ると、外国での軍事学歴があるのは、わずか北京軍区新任副司令員の白建軍だけである。彼は、56 歳（1958 年 10 月出生）、ロシアの総参謀部軍事学院、国家安全戦略課程を卒業した。その他の高官は進修生、及び研修生の経験があるに過ぎない。KDR は多数の中国高級軍人の署名を見たが、中国文字が歪んでおり、また話術は論理に欠け、政治的術語を羅列するのみであった。

4 つ目の特徴は、軍人の政治に対する発言権が過去に比べて大きくなり、一部の軍区では軍区政治委員が同時に当地の省市政府の常務委員を兼ねていた。これは極めて不可解な政治制度である。例えば、蘭州軍区政治委員 LIU LEI は新疆自治区の党委員会常務委員を兼ね、雲南省軍区では副政治委員 SHI XIAO が同様に雲南省委員会の常務委員を兼ねている。
武装警察と軍隊の高級将校は相互に人事交流している。この種の状況はその他の社会主義国家では稀である。この人事の動向は、周永康事件の影響であろう。周永康は政法委員会書記として武警を動かし、一定の発言権を持っていた。例えば総参謀部において元武警司令員の王建平大将は、元軍副総参謀長王寧中将と入れ替わった。この種の人事交流は、軍の階級から見ても一種の左遷である。習近平は武警を信任しておらず、今後武警内部の人事処置は継続観察する必要がある。
成都軍区の人事異動はかなり大規模で、紅二代の色彩が特に濃厚である。副司令は元参謀長の ZOU XIAOZOU である。その父は、元北京軍区司令の ZOU YIBIN であり、六四鎮圧で有名であった。副司令、参謀長、副政治委員はそれぞれ降下兵、濟南軍区、瀋陽軍区からの転入である。奇怪な人事は、元副司令阮志柏である。1950 年 12 月生まれ、2012 年 62 歳で病により死亡した。海外の中国メディアによると、彼は自殺したという。
軍における権力を如何に強化するか？次の手段は給与を上げることであり同時に閲兵することであり、習近平の軍に対する支配力を顕示することである。そのほか、対外外交政策でさらに強硬な姿勢に出ることであろうか？軍事的色彩は濃くなるか？習近平の事務室内の写真の多くが習近平の軍服姿の写真に差し替えられているようだ。これは習近平の尚武思想を示している。

以上